

2007/10/21  
新聞  
18頁

# 朝鮮近代文学と ナショナリズム

李建志 著  
(作品社・1890円)



リ・けんじ  
1969年生まれ。県立  
広島大教員、比較文  
学・朝鮮文化専攻。

朝鮮系苗字「李」と日本男子の名前「建志」をあわせもつ気鋭の学者の初の論文集だ。副題は「抵抗のナシヨナリズム」批判。「侵略し、抑圧するナシヨナリズム」批判は大前提である。権力／反権力、加害者／被害者、多数派／少数派というわかりやすい図式で考えては「ナシヨナリズムから自由になれない」ところを、著者自身が身をもって感じてきたことがよくわかる。

第一章では、崔洋一監督の映画「月はどっちに出ている」の原作者として知られる梁石日(リョクイ)の小説をとりあ

げる。「アパッチ族」と呼ばれる大阪の「在日」を題材にした彼の小説を小松左京「日本アパッチ族」、開高健「日本三文オペラ」と比較する手際が鮮やかだ。「在日朝鮮人文学」に対する「良心」的批評の持つ問題点も鋭く指摘している。つぎに三代にわたって異なる言語を経験してきた沖繩やアイヌ系作家と「在日」作家の姿勢を比べてゆく。ナシヨナリズムの問題に関心をもつすべての人びと、いや「自分は国際普遍主義」とおっしゃる方がたにも、ぜひ薦めたい一冊だ。さらに著者は、日本が朝

## 加害／被害の図式超え検討

鮮半島で「皇民化」を進めた時期に、日本語で書くことを推進した「親日」派の運動を、また第二次大戦後の韓国ナシヨナリズムの形成を、そして「朝鮮文学史」誕生の姿を掘りさげる。このあたりも見事な展開。

最後に、韓国内唯一の少数民族たる華僑、シヤージヤ―麵屋を営む人びとをめぐって。二本の韓国映画にもふれ、研究論文だが、文章もこなれて楽しめる。

これら六つの章の着眼点とさばき方が著者の異才をよく示し、またアメリカ式「同化」論が東アジアでは利かないことなど、教えられることも多い。

ここに日本語が漢文リテラシーを抱きこんだ「バイリンガルの国語」であったことを加味し、中国東北部に暮らした朝鮮族に、そして「抱きしめて差別する大東亜共栄圏」へと目を注ぐとき、さらにどんな展望がひらけてゆくか。今後の歩みにも大いに期待したい。

〈評者〉鈴木貞美  
(文芸評論家)